
 学 会 記 事

第40回下越内科集談会

日 時 平成11年11月19日 (金)

会 場 ホテル新潟

3F 飛翔の間

一 般 演 題

1) 透析が誘因と考えられた Wernicke 脳症

| | |
|-------------|------------|
| 西川 順治・飯塚 統 | （新潟大学脳研究所） |
| 他田 正義・小野寺 理 | |
| 原 賢樹・相馬 芳明 | （新潟大学第三内科） |
| 辻 省次 | |
| 田沼 厚人・後藤 眞 | （新潟大学第二内科） |
| 橋本 哲・合志 聡 | |

透析が誘因と考えられた Wernicke 脳症の2例を報告した。

2例とも経口摂取量の減少から6日で発症した。1例では摂食量低下後、連日で Vit.B1 5mg が経静脈的に使用されていたにもかかわらず発症した。

Vit.B1 は体内貯蔵量が約30mg に過ぎないのに対して1日2～5mg が消費され、腸管から吸収可能な Vit.B1 は最大5mg と限りがあるため、正常成人では Vit.B1 の補充が全くない場合、約20日で欠乏に陥るとされる。以前より摂食量低下状態で、末梢からの糖液単独での輸液や中心静脈による高カロリー輸液等によって Wernicke 脳症を来した症例が問題となっているが、透析症例では Vit.B1 が透析にて除去される可能性があるため、容易に Wernicke 脳症を発症する恐れがあると考えられる。

Wernicke 脳症は放置されれば致命的疾患で、治療開始の遅れで重度の記憶力障害等の後遺症を残すことが知られている。透析症例で摂食量が低下した場合には Vit.B1 の欠乏に留意し、万一意識障害や眼球運動障害が出現した場合には Wernicke 脳症を疑い、一刻も早く経静脈的に充分量の Vit.B1 を投与することが必要である。

2) MRI-FLAIR 法にて前頭葉病変を認めた Marchiafava-Bignami 病の一例

| | |
|-------------|-----------|
| 川村 剛 | （新潟こばり病院） |
| 赤岩 靖久・小島 直之 | |
| 小山 晃 | （同 神経内科） |

Marchiafava-Bignami 病 (MB 病) は、1903 年に Marchiafava と Bignami によって報告された脳梁の壊死性変化を来す神経疾患の一つである。アルコール多飲者が多く、臨床症状は意識障害、痴呆、構音障害、痙攣、筋緊張亢進、半球間離断症状等多彩である。剖検により脳梁の脱髄壊死という特異な病理所見を呈する。近年、頭部 CT や MRI 上での脳梁病変にて生前の比較的早期からの診断が可能となった。我々は大量の飲酒歴のある中年男性患者で、意識障害にて入院となり、痴呆、筋緊張の亢進や構音障害等の神経症状を呈し、CT、MRI にて脳梁病変を認め MB 病と診断し得た症例を経験した。本症例では、脳梁病変の他、前頭葉皮質を中心に MRI-FLAIR 法にて高信号の病変を認め、症状軽快に伴いこの前頭葉病変が消失した。T1、T2 強調画像ではこの病変は確認できなかった。今までこのような MB 病の画像所見の報告はなく、貴重な症例と思われる報告する。

3) D-penicillamine 投与中の経時的肝生検にて著明な組織学的改善を確認し得た Wilson 病の一例

| | |
|--------------|--------|
| 五十嵐 正人・須田 剛士 | （新潟大学） |
| 渡辺 雅史・野本 実 | |
| 青柳 豊・朝倉 均 | （第三内科） |
| 上野 光博・下条 文武 | |

Wilson 病は常染色体劣性遺伝による copper transporting Ptype-ATPase (ATP7b) の異常で、銅排泄障害により諸臓器への銅沈着をきたす疾患である。特に、肝臓への沈着は他の臓器に比して早期から観察され、脂肪化、繊維化を中心として、進行性に多彩な病理像を呈する事が知られている。治療としては銅のキレート剤である D-penicillamine の経口投与が中心であるが、進行した肝繊維化が同剤の投与により改善した例は少ない。今回我々は同剤投与中の経時的肝生検で著明な組織学的改善を確認し得た一例を経験したので報告する。

症例は30歳女性で、5歳時に他院で Wilson 病と診